

## 令和6年度 千歳市総合教育会議 議事録

▼日 時：令和6年11月26日（火）15：45～17：15

▼会 場：千歳市役所第2庁舎会議室5・6

▼出席者

(構成員) 市長	横田 隆一
教育長	佐々木 智
教育長職務代理者	荒井 由紀恵
教育委員会委員	杉本 功
教育委員会委員	曙 嘉輝
教育委員会委員	柴口 史子
(教育部) 教育部長	松崎 正信
教育部次長	中島 肇
学校指導室長	赤井 輝人
企画総務課長	井戸川 邦彦
学校指導課長	三田村 要
青少年課長	橋本 薫
企画総務課総務係長	阿部 健
青少年課生徒指導係長	甲斐 貴之
(事務局) 企画部長	石田 肅一
企画部次長	米澤 宏樹
企画課長	大西 正起
企画課企画調整係長	西河 琢
企画課企画調整係主任	小澤 稜

▼内 容

○石田企画部長

本日は、お忙しいところ、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

ただいまから、令和6年度千歳市総合教育会議を開催いたします。

私は、企画部長の石田でございます。本日の進行を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、ここで本会議の議長であります横田市長からご挨拶をお願いいたします。

○横田市長

本日、教育委員会の皆さまには、大変お忙しい中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。また、皆さまには日頃から教育行政に様々なご尽力をいただいておりますことに、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

さて、この会議は、今回で17回目の開催となります。昨年開催した会議におきましては、

「令和5年度全国学力学習状況調査の結果」や「部活動の地域移行」を議題に、教育委員の皆さまから様々なご意見をいただいたところであり、本市における教育政策の方向性を共有し、大変有意義な場になったものと考えております。

子どもたち自身にとりましても、また、本市としましても教育の充実は非常に重要であると認識しており、子どもたちが将来にわたり様々な選択をできる、そうした場を用意することが我々の役割だと思っております。

本日は、この後、「令和6年度全国学力・学習状況調査の結果」や「いじめ・不登校の対策の推進」について、ご意見を賜りたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。私からは以上であります。

#### ○石田企画部長

それでは、ここからは事務局が進行を務めさせていただきます。これより本日の議題に入りたいと思います。

1点目は「令和6年度全国学力・学習状況調査の結果」について、三田村学校指導課長から、説明をお願いします。

(資料に基づき、「令和6年度全国学力・学習状況調査の結果」について説明。)

#### ○石田企画部長

ありがとうございました。

この件につきまして、意見交換をお願いしたいと思います。皆さまからご意見やご質問などがあればお願いいたします。

#### ○柴口委員

今のご説明を聞いて、千歳市が目指す「探求型・対話型授業」への転換というものが、一定程度進んでいるということが、児童生徒の回答からも見えてきますし、ICTの利活用も進んでいることが分かりました。

昨年、この教育会議の場におきまして、「探求型・対話型授業」へ転換していくというご説明があった時に、千歳市の子どもたちのウィークポイントである基礎学力の部分について、どれほど学力の向上につながるのか、そして、現場の先生方がどのように受け止め、広がっていくものなのかと、懸念点についてお話ししたところ、バランスを見ながら考えていくということで、ご説明がありました。

そして、今回、学力テストの結果を見ますと、小学校におきましては、非常に良い結果が出ておりました。対話型授業やICTの活用により、他の子との意見交換や他者参照ができるということは、自分の考えを遂行する力を育てることに繋がったのではないかと推測しております。

中学校におきましては、ここ数年、数学の結果を心配しておりましたが、少しずつ結果が現れており、対話型授業への転換を進めながらも、実際に子どもたちの様子を見ながら基礎学力を習熟させるための既存の取組とバランスよく取り組まれていることと思えます。

また、児童生徒への宿題を含めて、授業中における ICT の利活用が定着したことにより、効果が出始めているのかなと思います。そして、デジタルドリルの導入により、基礎学力の向上につながり、今回の学力テストにおいて、数学の結果が少し伸びたのではないのでしょうか。これはあくまでも私の推測でありますので、教育委員会として、実際にどのような捉えられているのかお聞かせ願います。

#### ○三田村学校指導課長

委員のおっしゃるとおりだと我々も実感しております。基礎学力につきましても学習支援員等を入れ、個に応じた形で取り組むことにより、一定の積み重ねとして結果が出てきたものと捉えております。

一方、中学校におきましては、今回は苦戦しましたが、毎年テストを受ける生徒が違うため、一概には言えませんが、小学校の結果が徐々に上がってきている要因の一つとして、研修会の実施が挙げられます。現在、小学校2校を指定し、沢山の資料を読みながら、書き加えをしていく研修を実施しており、その研修会には、中学校の国語の先生にも来てもらい、小学校で学んでいる手法等もうまく引き継いでいただきながら、小中一体となった研修を実施しております。今後は、他の教科においてもこのような一体的な研修を広めていきたいと考えているところであります。

#### ○荒井教育長職務代理者

教職員の方が協力して子どもたちに丁寧に一つ一つ教えて、低学年においてもタブレットを活用しているということは、現場からも聞いております。一方で、保護者の方は、参観日などで見せていただくことはあると思いますが、実際にタブレットに触れる機会はないかと思えます。従来は紙で教えることができていたことが、タブレットの使用により、操作も含めて教えることが出来なくなるなど、難しい部分もあるのかなと思いましたが、保護者の方からは、実際にどのような意見が出ているのか、お聞かせ願います。

#### ○三田村学校指導課長

本日、皆さんに体験していただいたタブレットを活用した授業につきましては、小学1年生も同じようなことを授業で取り組んでいます。小学1年生も使用する想定のもと、メーカー側でソフトウェアも作られておりますので、直感的に使用することができ、失敗してもそこまで大きな問題にはならないため、保護者の方から特に困っているという声は聞いておりません。

勉強でつまづく部分につきましては、紙でも ICT でも同じでありますので、そこは保護者の方とも一緒に考えていただき、お願いしながら取り組んでおります。宿題につきましても、ICT だけで宿題を出すことはなく、従来の紙での宿題も併用しておりますので、今まで大事にしてきた部分も変わらず取り組んでおります。

#### ○曙委員

私も子どもの宿題を見てあげることがありますが、算数の計算などは紙で行う方が教える側の立場からするとやりやすいなと感じております。また、タイピングゲームなどもあ

り、ゲーム感覚で勉強できれば、子どもは自然と身についていくのだと感じております。勉強は分かれば楽しいので、特に低学年の勉強には、ゲーム要素を取り組むなど、そうした工夫があればもっと勉強を好きになってくれる子どもが増えるのではないかと思います。

#### ○三田村学校指導課長

探求型・対応型授業の一辺倒では基礎学力は成り立たないため、習得反復型も大事にしていきたいと思っております。特に、算数の計算につきましては、紙でいかに回数を重ねるかが大事になるものと思います。たくさん問題を解いて身につくこともありますので、この部分については、今後も大事にしていきたいと思っております。

また、タイピングについては、おっしゃるようにゲーム感覚で子どもたちはどんどん身につけていきますので、楽しみながら取り組んでいきたいと考えております。

#### ○横田市長

小学校1年生からICTを活用しており、今の子どもたちは、生まれた時からスマホなどのICTには親しみがあるものと思いますが、例えば、ICT機器を活用する授業において、機器の操作が不慣れなことにより、授業についていけない子どもはいるのでしょうか。また、不慣れな子の学習習熟度との関連性はあるのでしょうか。

#### ○三田村学校指導課長

ICTの活用につきましては、ICTサポーターを配置し授業の支援に入っております。機器の操作が苦手な児童生徒がいる場合は、都度、ICTサポーターがカバーしております。

また、ICT機器が上手く使えないために、授業に参加できないというのは、授業の作り方としては正しくありません。機器を上手く使いこなせない児童生徒もいる中で、どのようにICT機器を活用していくのか、担任の先生は、そこも踏まえて事業計画を立てていると思いますので、そうした形で少しずつ身につけていくものと考えております。

そして、先生が教えるだけではなく、児童生徒同士の学び合いの姿勢がうまく育ってくると、隣の席の子が使い方を教えてあげて、先生がその場にいなくても上手くサポートしてくれるなど、お互いの関係性の中にも学習を柱に繋がっていくことが期待できると考えております。

#### ○横田市長

全国学力・学習状況調査につきまして、これは紙ベースで実施されたテストなのでしょうか。それともWEBを活用して実施されたテストなのでしょうか。

また、学力・学習状況調査の結果（資料P.3-4）において、千歳市の状況として、小学校・中学校ともに棒グラフで「定着層」、「中間層」、「伸びしろ層」にまとめられています。例えば、それぞれの層がどの項目に課題があるのか、などクロス分析等により詳細まで分析しているのでしょうか。

○三田村学校指導課長

今年度の全国学力・学習状況調査につきましては、紙で実施しておりますが、質問紙と言われる部分につきましては、全てWEBでの回答になっております。

現在、国では、今後、全国学力・学習状況調査をICTで実施しようとしており、次年度については、中学校の理科を全てタブレットで行うということで通知が来ております。サンプル問題を拝見しましたが、内容としては、実験の動画を見て、その後の問題に答えるなど、ICTならではの設問となっており、図や動画などを活用した問題が出題されます。キーボードでも一定程度の記述の回答は求められており、今後につきましては、順次対象を広げていくような形になります。

続いて、分析についてであります。クロス集計を実施し、学校別・個人別の状況も把握しております。この分析結果につきましては学習支援に活用しております。

○石田企画部長

委員の皆様から、ほかに何かございませんか。

貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

それでは、議題の2点目「いじめ・不登校の対策の推進について」、橋本青少年課長から説明をお願いいたします。

(「いじめ・不登校の対策の推進」について、資料に基づき説明。)

○石田企画部長

この件につきまして、意見交換となります。

2点目の「いじめ・不登校の対策の推進」について、委員の皆様からご質問やご意見はございませんか。

○荒井教育長職務代理者

今は昔と違い、被害者が嫌な思いをしたら、それはいじめという定義になるので認知件数が増えることは当然だと思いますし、それはむしろ様々な手段で児童生徒の状況を観察できているものとして、評価すべきものと思います。

大事なことは、そうして認知したいじめに、いかに対応していくかということですが、対応にあたる教職員、特に若手の教職員などは対応に苦慮する場面が多いものと思います。そうした教職員を学校として、また教育委員会としてしっかりとフォローしていくことが非常に大切ではないかと思っております。

教育委員会ではどのようなフォローをしているのかをお聞かせ願います。

○橋本青少年課長

教職員のフォローにつきましては、校内に研修の場を設けて組織的に対応することとし、決して1人では抱え込まないよう、実施しております。特に若手職員の方は、経験が浅い部分もあると思いますので、学校全体としてフォローしながら組織で対応することとしております。

#### ○杉本委員

教職員の働き方改革ということは、近年、国においても盛んに言われており、市においても、取組を進めていることは承知しておりますが、なかなか、現場の先生方に余裕が生まれるという状況ではないと思います。

そうした状況で、先生個人ではなく組織的に対応することが重要かと思いますが、学校の中での組織、そして教育委員会との連携などについては、具体的にどのように対応されているのでしょうか。

#### ○橋本青少年課長

いじめが発生した時の学校・教育委員会の対応につきましては、学校では、年4回実施している、いじめアンケートのほか、教職員による児童生徒の日常観察、児童生徒本人または保護者、周囲の児童生徒からの相談などにより、いじめを認知した場合は、各学校の「いじめ防止基本方針」に基づき、いじめ対策組織において、組織的な対応を行います。

基本的な流れとしては、はじめに、訴えの内容について担任等が事実関係を確認し、学校いじめ対策組織において、管理職を含め情報共有を行い、対応方針を決定します。

その後、被害者への支援と、加害者の指導のほか、必要に応じて学級または学年、全校への指導を行い、被害・加害の各保護者へ対応状況を報告します。

対応後も校内の全教職員において情報共有を図りながら、いじめが解消の扱い（基本的には3か月）となるまで、再発防止に向けた見守りや、指導等を継続して行います。

教育委員会では、先ほどの説明と重複しますが、青少年課に生徒指導等、経験豊富な退職校長をスクールソーシャルワーカーとして3名配置するとともに、各学校には、スクールカウンセラーを、また、元教員や少年団体指導者などの地域の人材を活用した、心の教室相談員をそれぞれ配置し、児童生徒の成長段階の悩みや不安に応じた相談体制を確立し、いじめの未然防止、早期発見、早期対応に努めています。

また、個別のいじめ事案について、解決に至らない場合や保護者との関係が悪化した場合など、状況に応じてスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーを派遣し、学校に対し、適切な指導・助言を行うなど、必要な支援を行っています。

#### ○曙委員

いじめをゼロにするということは難しいとは思いますが、いじめの予防にもいろいろな方法があるものと思いますが、子ども一人一人が「いじめは絶対にいけない」という意識を持つことが大事であると思います。

そうした中、教育委員会では、いじめシンポジウムを毎年開催し、児童生徒への啓発活動を行っておりますが、実際にどのような効果があるのか、お伺いしたいと思います。

#### ○橋本青少年課長

いじめシンポジウムは、教育委員会が毎年開催しています。開催内容は基調講演と提言発表の2つで構成し、基調講演は、講師の講演動画をインターネット上で配信し、各家庭での視聴のほか、各学校における授業や学年集会、児童・生徒会活動などにおいて活用さ

れています。

実施後のアンケートでは、このシンポジウムをきっかけに、「コミュニケーションや夢、命の大切さを学ぶことができた」、「授業の中で視聴し、いじめ防止について話し合うことができた」「自分の学校の取組と比較することができた」、「各校の取組を参考にしたい」などの意見があったことから、多くの方に視聴していただき、いじめ防止の普及啓発の効果があるものと考えています。

#### ○柴口委員

先ほどの説明において、令和5年度の認知件数は、小学校で748件、中学校で138件とかなり多くあるとのお話がありましたが、具体的にはどのような内容が多いのでしょうか。

#### ○橋本青少年課長

具体的な内容につきまして、最近のいじめの傾向としましては、小学校・中学校ともに、「冷やかしゃからかい、悪口をいわれる」が最も多く、次いで「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたりする」や中学校では、「メールや無料通話アプリで悪口を書かれたり、仲間はずれにされたりする」が大半を占めています。

#### ○柴口委員

分かりました。最近、小中学校や高校も含めて、深刻ないじめに関する報道も増えておりますが、そのような事態を防ぐためにも、先ほどの話にもありました、積極的な認知、早期発見、早期対応は重要になってくるのではないかと思います。

実際にそのようなことから、いじめの認知については、日常の先生方による児童生徒の観察に加え、北海道のアンケート調査を2回、さらに市独自の調査を2回行うなど、細かな対応をしており、引き続き、これらの取組を継続していただきたいと考えておりますが、アンケートに回答することで、かえって加害者側から、「告げ口をしたな」ということで、いじめが増長する可能性もあるのではと心配するところですが、適切な対応がなされているのでしょうか。

#### ○橋本青少年課長

いじめの増長を防ぐための取組についてですが、アンケート内には、「いじめを受けたことを加害者に伝えてよいか否か」という項目があり、被害者との面談、聞き取りにおいても、改めて意向を確認したうえで、加害者からの聞き取り等を行っています。

被害者がアンケートに回答したことを伏せて欲しいという場合は、ほかの教員が見ていたとか、周りで見っていた子から訴えがあったなどとして、加害者からの聞き取り、指導等を行っています。

#### ○横田市長

学校現場では、先生方も非常に多忙な中にあり、いじめの問題につきましては、より慎重さが求められ、様々な配慮が必要となる中で、本当に悩ましい問題であるものと考えて

おります。教育委員会からもご説明がありましたように、未然防止と早期発見、早期対応につきましては、私からもお願いしたいと考えております。日頃の取組について改めて感謝申し上げます。

また、不登校につきましては、委員の皆さまからもお話をお伺いしたいと思いますのですが、本市における不登校の児童生徒数は、小学校と中学校で合計すると 321 名とのことであります。本市における中学校の生徒数につきましては、全体で約 2,600 名おり、このうち、不登校となっている児童生徒が 237 名ということは、全体の約 10%を占め、非常に大きな数字であると思っております。冒頭の挨拶でも申し上げましたが、次世代を担う子どもたちの様々な選択の可能性を広げるためにも、教育機会の提供は大変重要なことだと考えております。

こうした中で、今年度から千歳中学校において、校内教育支援センターの配置を施行されており、これからも拡大して進めていきたいということではありますが、予算にも関わる話でありますので、この場で確定的なことをお話することはできませんが、是非進めていただきたい取組であると考えております。

私も全国各地で様々な会議に出席しておりますが、首長同士の会話の中においても、いじめや不登校につきましては話題になり、どの自治体においても色々と悩まれており、難しい課題があるものと実感しております。今回のこの数字を見て、私も改めて課題認識を持ちましたが、今後どのようなアプローチをしていくのが良いか、皆さまはどのようなお考えをお持ちでしょうか。

#### ○杉本委員

不登校の要因はもちろんのこと、その背景を探っていくことが重要であると考えます。

また、不登校対策として、実証実験事業により、千歳中学校で校内教育支援センターの配置をされていますが、学校に偏りなく、どの中学校も同じような状況であれば、予算の関係もあるかもしれませんが、各中学校に校内教育支援センターを設置していただき、より対応の充実を深めていくことが大事であると思えます。

#### ○佐々木教育長

校内支援センターの設置につきまして、学校の中では様々な問題や課題に対応する必要があり、不登校の理由についても、漠然とした不安など明確な理由なく不登校になってしまう生徒もおり、一人一人が抱える状況に応じて、対応していかなければなりません。

学校における現状について、特に千歳市の現状について申し上げますと、市外に在住している先生や新人の先生が多い状況にあります。市外在住の先生におかれては、通勤距離が長くなり、目に見えない部分での負担が大きくなっている側面もあり、学校内の体制を取りづらいつつ状況にあります。こうした中、本市においては、学習支援員や特別支援教育支援員、部活動支援員など本当に多くの支援員を配置していただくなど、石狩管内において最も充実しており、大変ありがたく思っております。

このことから、学校における体制強化を図ることにより、子どもたちの様子や状況を把握し、一人でも不登校をなくしていくことを地道に取り組んでいく必要があると考えております。これらの問題を解決するための特効薬はありませんが、教育委員会としまして

も、学校と連携しながら支援員の体制を充実させ、一人一人に合った状況を把握した地道な対応をしていく必要があるものと考えてございます。

○横田市長

解決策は一つではありませんし、複雑な要因や背景もあるものと思います。教育委員会だけでは、この問題は解決できない部分もありますので、庁内の様々な部署とも連携し、いじめや不登校をなくすための糸口を探ってまいりたいと考えております。

この中学校における不登校生徒数が全体の約10%という数字は、非常に大きな課題として捉えていただき、知恵を絞りながら取り組んでいく必要があるものと認識してございます。

○石田企画部長

そのほかに何かございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、次に議題の3点目「その他」といたしまして、委員の皆様から何かございませんか。

ご意見などないようですので、以上をもちまして、本日の議題はすべて終了となります。

次に、次第の「4 諸連絡」についてであります。今年度の会議はこれで終了となります。

このほか、緊急に開催する必要があると認められる案件が発生した場合は、随時開催いたしますので、よろしく願いいたします。事務局からは以上であります。

以上をもちまして、令和6年度千歳市総合教育会議を終了いたします。